第八回 八戸市遺跡調査報告会

国宝　合掌土偶（風張 (1) 遺跡出土）

展示・報告遺跡

●湯ノ沢遺跡
八戸市大字櫛引　縄文、奈良時代、近世
横山　寛剛　八戸市教委文化財課学芸員

●田向遺跡
八戸市大字田向　縄文、弥生、飛鳥、平安、中近世
杉山　陽亮　八戸市教委文化財課学芸員

●田代遺跡
八戸市南郷区　縄文
浅田　智晴　青森県埋蔵文化財調査センター

発表

●「風張 (1) 遺跡と是川遺跡について」
村木　淳　八戸市教委文化財課副参事

展示遺跡

●林ノ前遺跡
八戸市大字尻内　縄文・古代

２００９年11月14日（土）
主催：八戸市教育委員会（文化財課）
於：八戸市総合福祉会館

平成21年度　八戸市内遺跡発掘調査地点位置図

	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因	種類	主な時代	遺構	遺物
試掘調査	館平遺跡	八戸市大字新井田地内	4月16日	27	個人住宅建築	集落	縄文～平安	×	×
	弥次郎窪遺跡	八戸市大字十日市地内	4月17日～6月12日	2.5	個人住宅建築	散布地	縄文	×	×
	根城跡下町	八戸市大字根城地内	4月23日	28	個人住宅建築	城館	中世・近世	×	×
	一王寺（2）遺跡	八戸市大字是川地内	4月27日～4月28日	38	個人住宅建築	貝塚	縄文	○	○
	塩入遺跡	八戸市大字新井田地内	5月1日	50	賃貸共同住宅建築	散布地	縄文・平安	×	×
	一王寺（1）遺跡	八戸市大字是川地内	5月11日～7月10日	650	範囲・内容確認	集落・貝塚	縄文・古代	○	○
	骨沢（1）遺跡	八戸市大字鮫地内	5月25日	10	個人住宅建築	貝塚	縄文	×	×
	館平遺跡	八戸市大字新井田地内	5月27日	25	共同住宅建替	集落	縄文～平安	×	×
	一日市遺跡	八戸市大字櫛引地内	6月1日	46.2	道路舗装工事	散布地	歴史時代	×	×
	潟野遺跡	八戸市大字是川地内	6月12日	23	農業用倉庫建築	散布地	縄文・平安	×	×
	狐森遺跡	八戸市大字糠塚地内	6月16日	11	個人住宅建築	散布地	縄文	×	○
	八戸城跡	八戸市内丸地内	6月24日	2.94	個人住宅建築	集落	弥生・古代・近世	×	○
	八戸城跡	八戸市大字新井田地内	7月30日	70	診療所建設	集落	弥生・古代・近世	○	○
	法霊林遺跡	八戸市大字田面木地内	8月31日	27	個人住宅建築	散布地	平安	○	○
	石橋遺跡	八戸市大字妙地内	9月16日～9月17日	25	個人住宅建築	集落	平安	×	○
	館平遺跡	八戸市大字新井田地内	10月2日～10月6日	83	駐車場造成	集落	縄文～平安	○	○
	田面木遺跡	八戸市大字田面木地内	10月14日	16	個人住宅建築	集落	古代	×	×
	八太郎山遺跡	八戸市大字大字河原木地内	10月28日	3.75	進入防止柵設置	散布地	縄文、平安	×	×
発掘調査	田向冷水遺跡	八戸市大字田向地内	4月20日～7月31日	11,495	田向土地区画整理	集落	旧石器～近世	○	○
	山内遺跡	八戸市大字糠塚地内	4月22日～4月30日	114	個人住宅建築	包含地	縄文・平安	○	×
	千石屋敷遺跡	八戸市大字八幡地内	4月27日～5月19日	90	個人住宅建替	包含地	縄文	○	○
	林ノ前遺跡	八戸市大字尻内町地内	5月20日～9月11日	1,400	自然崩落防止	集落	縄文　平安	○	○
	高岩遺跡	八戸市大字上野地内	6月12日	65	個人住宅建築	散布地	縄文・奈良・平安	○	○
	一日市遺跡	八戸市大字櫛引地内	7月14日～7月23日	75	個人住宅建築	散布地	歴史時代	○	○
	新井田古館遺跡	八戸市大字新井田地内	7月15日～7月29日	90	個人住宅建築	集落	縄文・古代・中世	○	○
	館平遺跡	八戸市大字新井田地内	7月16日～7月31日	692	携帯電話基地局建設	集落	縄文～平安	○	○
	湯ノ沢遺跡	八戸市大字櫛引地内	8月3日～11月13日	10,000	最終処分場建設	散布地	縄文・古代・近世	○	○
	松ヶ崎遺跡	八戸市大字十日市地内	8月19日～10月20日	16	個人住宅増築	集落・貝塚	縄文・古代	○	○
	新井田古館遺跡	八戸市大字新井田地内	8月20日～9月3日	332	下水道建設	集落	縄文・古代・中世	○	○
	重地遺跡	八戸市大字新井田地内	9月8日～9月25日	223	下水道建設	集落	縄文	○	○

平成 21 年度　調査一覧

湯ノ沢遺跡

１．遺跡の概要

湯ノ沢遺跡は八戸市大字櫛引字湯ノ沢・永森地内に所在します。遺跡の範囲は東西２８４m、南北２３４m、総面積は約 20,000 ㎡です。本遺跡の標高は 75 ～ 105m で、南東から北西に伸びる尾根と、北方向に流れる沢地、およびその対岸の緩斜面に立地しています。

本遺跡は平成 19 年の新最終処分場の建設に伴う試掘調査により発見され、平成 20 年の試掘成果と合わせて、縄文時代、古代、近世の集落跡であることがわかっています。

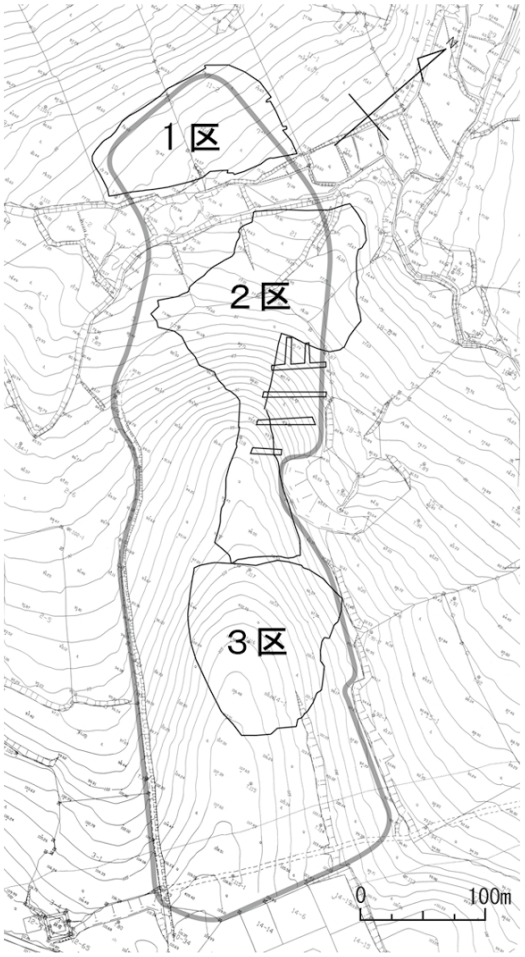
２．今年度の調査成果

今年度調査した面積は約 10,000 ㎡で、検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡 4 棟、土坑約 60 基、陥し穴 4 基、古代の竪穴住居跡 3 棟、江戸時代の掘立柱建物跡 3 棟、ピット約 250 個、整地跡です。出土した遺物は縄文時代の土器、土製品、石器、石製品、古代の土師器、江戸時代の陶磁器、鉄製品、古銭などです。調査区 1 区に古代・近世、２区に縄文時代の遺構・遺物が多く見られ、３区には遺構・遺物が少ない傾向にありました。

縄文時代の遺構で注目されるのが、2 区の舌状に張り出した尾根上で検出された土坑群です。土坑群は大きく 2 種類がみられ、１つは平面形が楕円形で、底面は船底形を呈し、掘り込みが比較的浅いのもの、もう 1 つは平面形が円形で、断面形はフラスコ形を呈し、掘り込みが深いものがあります。前者は土坑の中から土器や磨製石斧が出土し、それらは出土状況から意図的に置かれたものであると推測されます。また、土坑の覆土が埋め戻し土であることを考慮すると、これらの土坑はお墓であった可能性があります。後者の土坑群は、木の実などの食料を保存するための貯蔵穴であると考えられます。

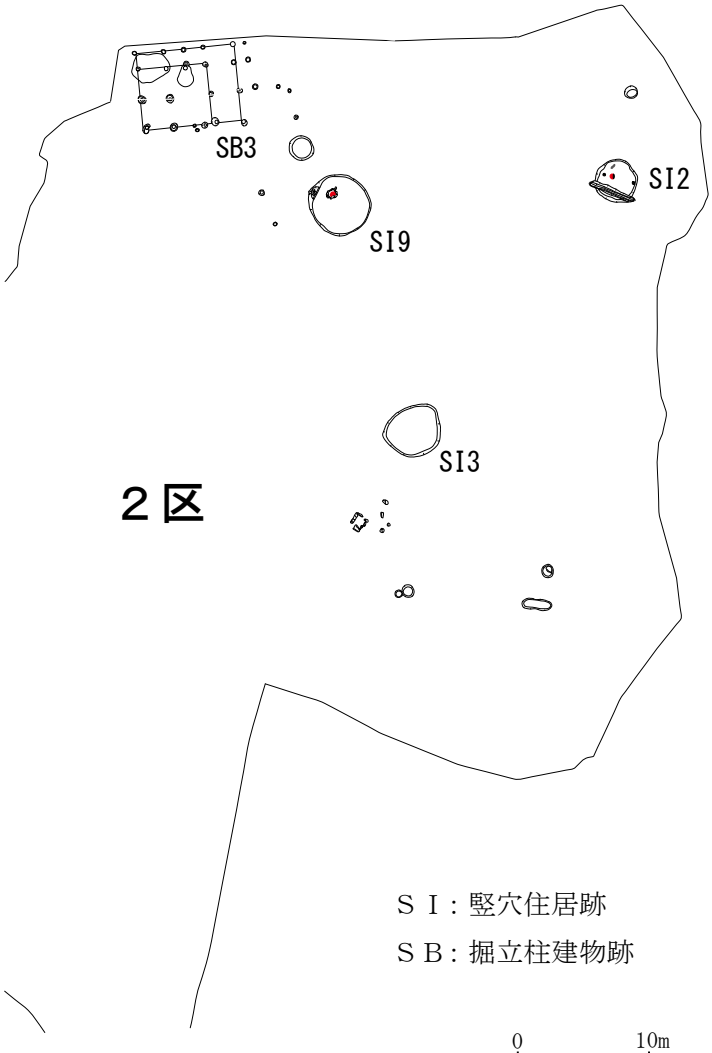
古代の竪穴住居跡のうちＳＩ１竪穴住居跡では、カマドの脇から完全な形の甕が出土しており、この甕の特徴から奈良時代のものであると考えられます。また、ＳＩ６竪穴住居跡には苫小牧火山灰と十和田ａ火山灰が厚く堆積しており、これらの火山灰は１０世紀前半に降ったことが判明しているので、少なくとも平安時代以前の住居跡であることがわかっています。

近世の遺構は掘立柱建物跡が３棟見つかっています。SB2 は土間と考えられる硬い面が検出されています。SB3 は庇をもつ総柱建物跡と考えられます。また、1 区の緩斜面に建物を建てるために、切り土をした跡（整地遺構）も見つかっています。その他、建物跡周辺で検出された多数のピットは建物を構成する柱穴であった可能性があります。（横山 寛剛）



湯ノ沢遺跡地形図

２区土坑群



ＳＩ：竪穴住居跡

ＳＢ：掘立柱建物跡

0　10m

湯ノ沢遺跡遺構配置図

田向遺跡

１．遺跡の概要

田向遺跡は八戸市田向地区に所在し、遺跡の東側には新井田川が流れています。田向土地区画整理事業に伴い、平成 13 ～ 15、17 ～ 20 年の計 7 年間の発掘調査が実施されました。調査総面積は 67,898 ㎡でほぼ 1 遺跡全体を調査しており、市内では最大規模の発掘調査となりました。本遺跡からは縄文時代早期中葉、弥生時代前期、飛鳥時代、平安時代～近世にわたる様々な時代の遺構・遺物が出土しており、長期にわたってこの土地が利用されていたことがわかります。今回は、発掘調査全体の成果の総まとめとして紹介します。

２．調査成果

縄文時代：縄文時代早期中葉（白浜式）の竪穴住居跡 24 棟が検出されました。この時代の住居は、形は長方形で炉を持っていないことが特徴です。おそらく、屋外で調理などを行なっていたと思われますが、本遺跡ではその痕跡は見つかっていません。白浜式土器は底が平らではなく、尖っています（尖底）、文様はアカガイなどの貝殻を利用して描いています。

弥生時代：竪穴住居跡 5 棟、土坑 16 基が検出されました。これらの遺構は遺跡北東側に集中しています。出土土器の特徴から竪穴住居跡は弥生時代前期後半（馬場野Ⅱ式期）のものと考えられます。これらの住居は円形で、住居中央に炉を持っています。炉は地床炉や石囲炉のほか、土器を埋めた土器埋設炉がみられます。隣接した田向冷水遺跡では炭化した米がみつかっているので、本遺跡でも稲作を行なっていたのかもしれません。

飛鳥時代：竪穴住居跡 3 棟、竪穴遺構 3 基、土坑 1 基が検出されました。出土土器の特徴から竪穴住居跡は 7 世紀中葉～後葉のものと考えらます。これらは遺跡南東にみられます。

平安時代：本遺跡ではこの時代の竪穴住居跡が最も多くみられます。竪穴住居跡は 60 棟、竪穴遺構 5 基、土坑 8 基が検出されました。出土土器の特徴からいずれも 9 世紀中葉～後葉のものと考えられます。これらの遺構は主に遺跡南側に広がっていました。

竪穴住居跡は隅丸方形で、壁際にはカマドが設けられています。竪穴住居の大きさは、大型（約 6 ～ 7m 四方）、中型（約 4 ～ 5m 四方）、小型（約 3m 四方）に分けることができ、中型のものを最も多くみることができます。大型のものは 6 棟ほどが該当しますが、鉄製品や須恵器といった希少価値の高い遺物が出土する傾向がみられます。例えば、4SI14 竪穴住居跡では、須恵器の壺 3 点、鉄製紡錘車、鉄鏃、刀子が出土しており、本遺跡中最も多い出土量となっています。また、同じく大型の 4SI30 竪穴住居跡では、特異な遺物出土状況がみられ、住居を廃棄する際に火をつけて燃やし、その後、大型の須恵器の甕を粉々に砕き、住居の上にまいている痕跡が認められます。一方で最も多くみられる中型の住居では、大型の住居にはみられないような特殊な遺物が若干出土しています (1SI9：金銅製壺鐙（馬具。ウマに乗る際に足をかける道具）、4SI52：石帯（ベルトに着ける装飾品。身分を示す）4SI65：金銅製足金具（刀のさやにつける道具）)。

中近世：平安時代と同様に本遺跡を特徴付ける時代です。遺構では塀跡 63 条、掘立柱建物跡 132 棟、竪穴建物・竪穴遺構 19 棟、土坑 222 基、土坑墓 40 基、溝跡 75 条、井戸跡 26 基が

検出されています。掘立柱建物跡は 7 箇所に集中してみることができます。遺跡中央北側の掘立柱建物群は 15 ～ 16 世紀のもので、最も古く位置付けられるものです。周囲に多数の井戸跡や竪穴建物、土坑などが検出されており、他の掘立柱建物群とは明らかに様相が異なっています。この場所には有力者の館があったという言い伝えもあり、居館跡であった可能性があります。

遺跡南半にみられる掘立柱建物群は主に 18 ～ 19 世紀のもので、この辺りに江戸時代の集落があったと推測されます。20 基の土坑墓が密集した墓地もこの集落に伴うものと考えられます。ただし、これらの家も明治時代初めに作成された地籍図には記されていないので、江戸時代末までに集落から畑地へと土地利用の仕方が変化したようです。(杉山 陽亮)

田向遺跡調査範囲

田向遺跡年度毎調査範囲（2001 ～ 2003 年、2005 ～ 2008 年）

田代遺跡

１．遺跡の概要

田代遺跡は八戸市と階上町の境界に接した、八戸市南郷区島守字番屋に所在します。遺跡周辺の地形は階上岳の裾野にあたる高位段丘ですが、調査区内には深い谷が存在し、東西方向に伸びる尾根と谷が交互に並ぶようになっています。平坦面は非常に少なく、調査区内の標高は200 ～ 225 mと高低差があります。

本遺跡の調査は、青森県八戸市から岩手県洋野町まで延びる県道八戸大野線の道路改良事業に伴い実施しました。路線内の調査対象面積は約 15,000 ㎡で、平成 16 年度に 5,500 ㎡、平成 17 年度に 3,600 ㎡の調査を行っています。今年度は約 5,700 ㎡で調査を行いました。

これまでの調査成果として、縄文時代早期から弥生時代後期まで、幅広い時代の遺物が出土しており、中でも縄文時代中期末葉から後期初頭を中心とした時期は集落跡であることが判明しています。また近世の遺物も出土していますが、県道八戸大野線は久慈街道に沿っており、田代遺跡が田代番屋跡に隣接していることに関連するものと考えられます。

２．今年度の調査成果

今年度は 4 地点の調査を行いましたが､調査成果は全て遺跡南側の 1 地点から得られました。検出された遺構は竪穴住居跡 22 棟、土坑 22 基、土器埋設遺構 1 基、溝状土坑 2 基です。出土した遺物は縄文土器、続縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品です。

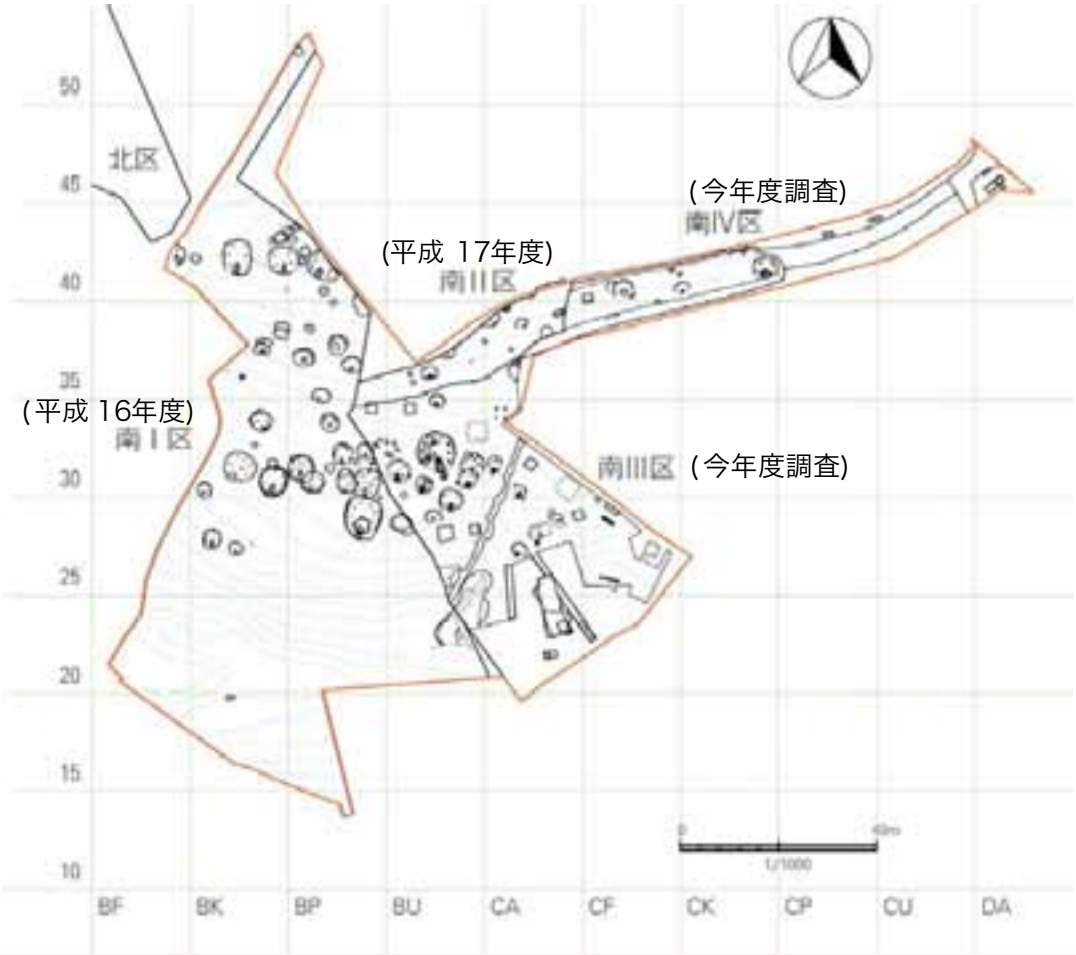
遺跡南側の調査区は谷に面した南向きの斜面地で中間に傾斜が緩やかになる部分があります。緩斜面地には大型の竪穴住居跡を囲むように中・小型の竪穴住居跡が存在し、急斜面には主に小型の竪穴住居跡が見つかり、これまでの調査成果と同じ傾向を示しています。

竪穴住居跡には火を焚いた炉跡が見つかっています。様々な形が見つかっており、今年度最も多かったのが床の上で直接火を焚いた地床炉、次いで板状や棒状の石で掘り窪めた穴を囲んだ石囲炉があり、これまでの調査では半数を占めていた「複式炉」と呼ばれる形のものは減っています。複式炉は竪穴住居跡中央から見ると斜面下側に偏って造られています。最も大きいものでは地床炉、石組部、前庭部と 3 部構成になっており、前庭部はいずれも硬く締まっていました。炉跡は竪穴住居跡の大きさに比例して大きくなる傾向があり、特に大型の第 48 号竪穴住居跡には複式炉 2 基を含む大小 9 基の炉が造られていました。

炉跡以外で焼けた土が見つかった竪穴住居跡から多くの炭化材が出土しました。第 60 号竪穴住居跡は炭化材の上に焼けた土がのっていたことから、屋根に土が葺かれていた可能性が考えられます。またこの竪穴住居跡と第 48 号竪穴住居跡の壁際から、棒状の石が立った状態で出土しました。表面には特に使用された痕はありませんでしたが、縄文時代の人々が何らかの意味を込めて立てていたと考えられます。

遺物は主に竪穴住居跡が埋まる途中の窪みに捨てられていました。遺構の時期を決める床面の土器には文様がついていないものが多く、これまでの調査結果と同様の傾向を示しています。変わった遺物として、第 51 号竪穴住居跡の堆積土から赤色顔料を貯めていたと考えられる壺が出土しました。少々いびつな形をしており、土器の表面には広葉樹の葉脈痕や指の跡が明瞭に観察できます。これまでの調査でも赤く塗られた土器が出土しており、分析の結果､「ベンガラ」であることが判明しています。赤く塗られた遺物と、赤色顔料を貯めていた壺の存在は、この集落の中でモノを赤く塗る行為が行われていた可能性があることを示すものです。

（浅田　智晴）



田代遺跡　南区遺構配置図

第 51 号竪穴住居跡出土土器　赤色顔料入り壺形土器　出土状況

「風張 (1) 遺跡と是川遺跡について」

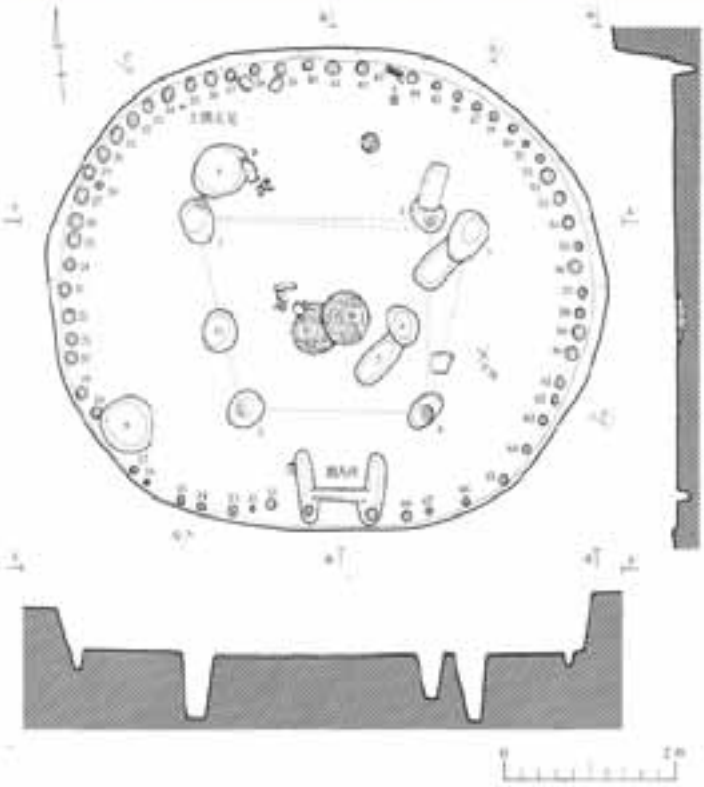
新井田川流域には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの遺跡が所在します。風張 (1) 遺跡・是川遺跡もその流域における一つの遺跡です。風張 (1) 遺跡は新井田川の右岸・是川遺跡 (一王寺・掘田・中居遺跡) は左岸に位置します。風張 (1) 遺跡と中居遺跡の間は直線距離にしてわずか 700 m程度で、お互い見渡せるような距離にあります。

しかし、これらの遺跡では主体的に出土する土器の年代が異なっていることから、同時期に集落が営まれたわけではありません。

風張 (1) 遺跡は、縄文時代後期中葉から末葉 (十腰内Ⅲ～Ⅴ式) にかけて営まれた遺跡です。一方、中居遺跡は縄文時代後期中葉の竪穴住居跡も確認されていますが、主に晩期 (大洞 B ～ A´ 式) を中心とし、風張 (1) 遺跡に後続する年代の遺跡と考えられます。また、中居遺跡は弥生時代前期初頭まで (砂沢式) 継続しますが、風張 (1) 遺跡には砂沢式に後続する住居 (馬場野Ⅱ式) が出現します。つまり、両遺跡の営まれた時期を時系列順に追ってみると、風張→中居→風張という連続性が読み取れるわけです。このように風張 (1) 遺跡と中居遺跡は切っても切れない関係にあります。

その他、是川周辺には、館平遺跡 (縄文時代早期中葉)、赤御堂遺跡 (早期後葉)、一王寺遺跡 (前期前葉から中期中葉、円筒下層 a ～上層 c 式)、石手洗遺跡 (中期中葉～後葉)、松ケ崎遺跡 (中期後葉) の大遺跡が所在します。（村木 淳）

風張 (1) 遺跡



合掌土偶が出土した第 15 号竪穴住居跡

林ノ前遺跡

１．遺跡の概要

林ノ前遺跡は、八戸市北西部の尻内町熊ノ沢地区、浅水川左岸の舌状台地上に位置する平安時代の遺跡です。これまでの調査によって、台地上と北西に面した斜面に 10 世紀中葉～ 11 世紀前半にかけての集落がひな壇状に営まれ、鉄や銅のほか、金・銀も含めた金属製品の製作が行われていたことが知られています。

八戸市教育委員会では平成 13 年から継続的に調査を行い、これまでに竪穴住居跡・竪穴遺構 81 棟、土坑 335 基等の多くの遺構が見つかっています。今年度は、竪穴住居跡 14 棟、土坑 24 基、整地遺構 1 か所、溝跡 3 条、溝状土坑 3 基を検出しました。

出土遺物は、土師器・須恵器・鉄製品・石製品・鉄滓等の平安時代の遺物のほか、縄文時代早期の土器片も多数出土しました。今回は、今年度の調査成果から、特徴的な遺構・遺物について紹介します。

２．竪穴住居内で検出された鍛冶遺構

今年調査を行った SI96 竪穴住居跡では、床中央に直径約 26cm、深さ 6cm の鍛冶炉とみられる掘りこみを検出しました。掘りこみ中央には溶けた鉄滓が薄く固まった層がみられ、周囲の土は赤く焼けています。隣にみつかった直径約 20cm、深さ 20cm のピット（小穴）からは、鍛冶の際に排出される鍛造剥片（たんぞうはくへん）が検出されました。住居内で小規模な鍛冶を行っていたことがわかります。この住居からは、ほかにも床を掘りこみ、火を焚いて埋め戻した土坑も見つかっています。

３．特徴的な遺物

林ノ前遺跡では、鉄鏃・刀装具といった武具から、鎌・手鎌・鋤先・紡錘車などの農耕具・生産用具を含む多様な鉄製品が出土しています。

今年度の調査では、錫杖状鉄製品（しゃくじょうじょうてつせいひん）と呼ばれる鉄製品が 2 点ずつ、2 基の遺構で見つかりました。錫杖状鉄製品は、頭部に羊角状に丸めた環を作り、棒状・角柱状の基部をもつ鉄製品で、頭部の環には板を丸めた筒状の「鐸（たく）」が「遊環（ゆうかん）」によって装着されます。用途は不明ですが、錫杖と同様に振って音を鳴らす祭祀具の一種と考えられ、特に北東北での出土例が多く知られています。

SI92 竪穴住居跡では、住居が埋め戻された土の途中に、やや離れて 2 点見つかりました。2 点は、頭部に遊環が 2 点づつ装着され、鉄鐸が付属していません。大きさ・特徴がよく似ているため、一対とみられます。出土状況から、住居がある程度埋まった段階で置かれた、または投げ込まれたと考えられます。

SK346 土坑は、直径 1.5m の円形の土坑で、土坑底面で 2 点の錫杖状鉄製品が重なった状態で出土しました。頭部には鉄鐸と遊環が 2 点づつ装着されています。

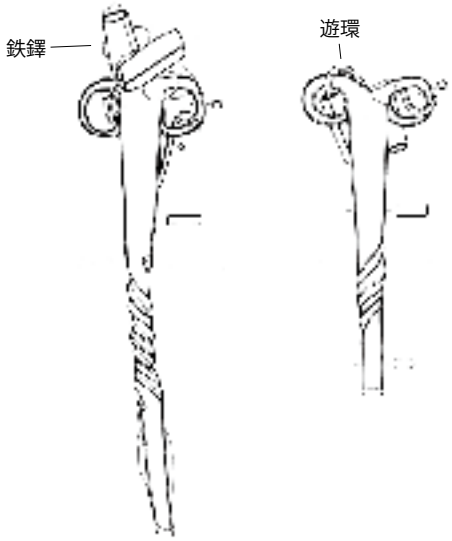
錫杖状鉄製品は、これまでの林ノ前遺跡の調査でも出土していますが、遊環・鉄鐸が付属した完全な形で出土したものはなく、八戸市内では上七崎（かみならさき）遺跡についで 2 例目の出土例です。また、錫杖状鉄製品と鍛冶遺構には相関関係が指摘されており、特異な出土状況も含め、林ノ前遺跡の検討を進めていくうえで貴重な資料となりました。(船場　昌子)

平成21年度調査区全体

SI96完掘　中央に鍛冶炉が検出されました

SI96鍛冶炉・ピット
左：鍛冶炉には鉄滓が薄い層をなしています。
右：ピットからは鍛造剥片が見つかりました。

SI92錫杖状鉄製品出土状況



上七崎遺跡出土錫杖状鉄製品(縮尺1/3)

SK376錫杖状鉄製品出土状況

SK376錫杖状鉄製品拡大

報告会次第

13：00　開場・受付開始

13：30　開会挨拶

13：35　21年度調査概要

13：40　調査成果報告　湯ノ沢遺跡

14：00　調査成果報告　田向遺跡

14：20　10分休憩

14：30　調査成果報告　田代遺跡

14：50　発表「風張(1)遺跡と是川遺跡について」

15：20　質疑応答

15：35　閉会挨拶

15：40　閉場